

……第61回TQE特別委員会の模様……



今回紹介された事例はトヨタ自動車の間接部門や幼稚園、養護老人ホーム、魚市場、さらにはQC手法の使い方や“やる気” etc. などの、企業の職場で展開されてきたQCサークル活動の幅広い分野の内容でした。

品質管理や統計分野の専門家でもあるTQE特別委員会の委員にとっては身近なQC手法ですが、一方でそうしたものに触れたことのない学校の先生方にこれらの事例を理解して頂くには“言葉の壁”や学んできた“文化の壁”があるのではと言った指摘もありました。

文部科学省が学習指導要領で求めた“生きる力を育む”と言っても、学校の各クラスにある問題は少なくないものと考えられ、それらの問題解決に企業内に蓄積された膨大な問題解決事例を役立てるには、先生方に理解・活用頂くための水平展開のステップが求められるのではと言った意見もありました。



またクラスの問題解決では、過去に委員会でも紹介されたアドラー心理学の「クラス会議で学級は変わる」のように生徒が抱えている問題を自主的に議論し、解決策を考え出すような問題解決のためのプロセスやブレインストーミングやブレインライティングのような“アイデア発想法”などの情報提供も必要ではとの意見もありました。



また、先生のための支援教材としては量産工場におけるQCサークル活動が活用する問題解決ストーリーやQC七つ道具、中でも“数値データ”を中心としたQC七つ道具(Q7)だけではなく、むしろサービス産業などには不可欠な言語データを“見える化”するためのツールでもある“新QC七つ道具(N7)”を理解できるように、それを組合せた問題解決ストーリーを考える必要があるのではと言った意見が出ました。

特に今回紹介されたJHS部門の運営事例は、問題解決力向上のため長期的なスパンで問題解決に取り組んでいるもので、学級での年間を通じた問題解決やアクティブラーニング指導への参考になるのではといった意見がありました。

その他にも今回紹介された事例の切り口が、業務改善に役立つQC手法といった専門的なものから、女性に優しい職場づくり、保育園の持ち物の入れ間違いを無くそう、やる気・やる腕・やる場の3づくり、地球に優しい職場づくりなど身近なキーワードがあふれ、QCサークル活動という切り口では難しいと思われる内容も、切り口次第で身近な改善活動になることが解り、学校の先生方の抵抗感が和らぐのではと言った意見もありました。

特に環境問題などは学校でも積極的に取り組んでおり、先生方が指導する際にも取り組み易いテーマであり、より先生方が理解し、展開し易くする支援法を具体化することになりました。

来年3月25日(土)開催予定の第6回《科学技術教育フォーラム》は電気通信大学を会場に具体化する計画です。

次回委員会は10月3日(月)の予定。